

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
「知性・感性・耐性」を自らのため る 生徒の育成	① 将来へ向けた確かな学力を身につけさせる。 ② 道徳教育等により、豊かな心を育てる。 ③ 生徒自身のたくましい自立と豊かな自律を促す。 ④ 安心安全で生徒が明るく活動する環境を作る。 ⑤ 業務を改善し、教職員の資質・能力を高める。

達成 A：ほぼ達成できた
 B：概ね達成できた
 C：やや不十分である
 D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

① 将来へ向けた確かな学力を身につけさせる。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	学びを支える目的意識や自己実現に向けた意欲が高まっているか。	・将来の夢や目標を持つ生徒が80%以上をめざす。	・道徳、学級活動、学年集会等で「夢をもって生きる大切さ」、「将来の自分らしい生き方」、「将来の日本や社会の姿と自分の生き方」などの題材の授業や講話を行う。 ・自分の考えをペアワークにより引き出し、互いの将来に対して意見を交換させる。 ・上級学校の調べ学習や高校の先輩方を学校に呼び、先輩方に学ぶ機会を与え、目的意識の高揚につなげる。	A	・生徒へのアンケート「あなたは、将来の夢や進路の目標をもっていませんか。」において、そう思う、だいたいそう思うが全体の82%であり、具体的な目標はおおむね達成できている。 ・どの学年も、主に道徳などにおいて、「夢をもって生きる大切さ」などの題材を取り扱い、授業実践することができた。	・互いの将来に対して意見を交換させ、考えを引き出し合うペアワークなどの活動は、学年によって異なるので、共通実践できるようにして、集団の親和性を高める。 ・夢をもてない生徒の実態を把握し、個別に支援する方法について共通理解する。
教育活動	●学力の向上	授業と家庭学習で基礎的な知識・技能を定着させ、思考力や表現力を伸ばせたか。	・家庭学習を毎日1時間半以上する割合80%以上をめざす。 ・学習状況調査12月調査の正答率が県平均を上回ることをめざす。	・家庭学習の重要性を学活や学年集会、保護者会、授業中などの機会を捉えて的確に伝える。 ・学習文化委員会と協力して自主学習ノートのコンテストをする。 ・生徒が自主学習ノートにかけた時間、内容から実態を把握し、個に応じた学習課題を提示する。 ・4月調査の結果の分析を教科部会や学年会でおこない、教科と学年の双方から課題解決の取組をする。	B	・家庭学習を1時間半以上する生徒は67%(目標に対する8割)にとどまっており、家庭と協力して取り組む必要がある。 ・自主学習ノートのコンテストまでは実施しなかったが、模範となるノートを掲載や文化発表会で紹介した。 ・県学習状況調査12月調査の結果は対県比の平均が1.2年とも9割を超えているものの県平均を上回ることができなかった。しかし伸びは数教科で認められる。 ・教科部会と学年会で分析と対策をしたが、12月の結果に十分には結びつかなかった。 ・3年生はSAGAテストにおいて県平均をかなり上回った。	・学習することの意義から生徒に理解させ、自主的に学ぼうとする意欲を育てる。 ・朝や帰りの会、集会、進路指導などあらゆる機会をとらえ、学習の重要性を考えさせる。 ・帰宅後のタイムスケジュールを自己管理できるような自律心を育てる。

② 道徳教育等により、豊かな心を育てる。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	「感性」を高める教育は実践できているか。	・明るく元気なあいさつができる生徒80%以上をめざす。 ・道徳の授業が役に立っているという生徒80%以上を維持する。	・生徒会活動とリンクして朝のあいさつ運動を行い、明るく元気なあいさつ運動で一日をスタートさせるようにする。 ・道徳授業の年間計画の見直し、TTや輪番による授業システムの工夫、「伝え合う」場面の工夫、適切な見取りによる評価を行う。 ・朝の会・帰りの会、集会等で心を磨き、豊かな感性を育てる話をし、道徳の授業との連携を図る。	A	・アンケートでは、挨拶は生徒89%、保護者79%が明るく元気な挨拶をしていると答えている。道徳の授業に関しては、生徒83%、保護者97%が役に立っていると答えている。それらに比べて教職員の結果では両方とも75%であることから、生徒会活動とリンクした取り組みの継続はもちろん、道徳の教材研究を充実させていく必要がある。	・生徒会活動の活性化 ・今年度の道徳授業全般の振り返りと来年度に向けた共通理解事項の確認
教育活動	●いじめ問題への対応	学校、学年、学級はいじめのない生活の場づくりを行っているか。	・学校がいじめ防止に取り組んでいると思う生徒90%以上を維持する。	・いじめ防止の視点を持った道徳の授業やグループエンカウンターを取り入れた学活を行い、学級の絆づくりと規律づくりを進める。 ・生徒指導部会や協議会で情報の共有化を図り、毎週の生活アンケートや学活ノートを活用し未然防止及び早期発見に努める。 ・SCやSSWなどの支援を受けた職員研修やにじいCAPの研修を保護者・生徒・職員が受け、お互いを認める関係づくりや、教育相談の充実を図る。 ・学校行事や生徒会活動を、より生徒主体で計画運営させ、自律の心を育て、生徒自らがいじめ防止への取り組みができるようにする。 ・身近にある人権問題を新聞などを活用して授業で取り上げ、話し合い活動を行い、解決策を自分のこととして考えさせる。 ・いじめ兆候があれば、管理職・生徒指導主事に速やかに報告し、組織的に事実確認・指導・謝罪・生徒のケア・未然防止への取組を行う。	B	・学校のいじめ防止の取組に対して、生徒の88%と保護者の95%が理解を示している。生徒指導部会等で情報の共有化を図り、生活アンケートや学活ノートを活用し、いじめの未然防止と早期発見に努めることができた。 ・SCやSSWなどの支援を受けた職員研修やにじいCAPの研修を保護者・生徒・職員が受け、お互いを認める関係づくりや、教育相談の充実を図ることができた。 ・身近にある人権問題を人権週間などで扱い、生徒は自分たちの人権について考えることができた。 ・いじめや生徒間トラブルは、管理職・生徒指導主事に速やかに報告し、組織的に事実確認・指導・謝罪・生徒のケア・未然防止への取組を行うことができた。	・いじめ防止の視点を持った道徳の授業やグループエンカウンターを取り入れた学活のバリエーションを増やしていく。 ・生徒指導部会や協議会で情報の共有化をより密に図り、生徒1人1人の理解に努める。 ・SCやSSWとの連携をより密に行い、お互いを認める関係づくりや、教育相談の充実を図る。 ・学校行事や生徒会活動を、より生徒主体で計画運営させ、自律の心を育て、生徒自らがいじめ防止への取り組みができるよう、引き続き取り組んでいく。

③ 生徒自身のたくましい自立と豊かな自律を促す。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	「耐性」を高める教育は実践できているか。	・難しいことやつらいことに粘り強く取り組んでいる生徒80%以上をめざす。 ・自分で正しい判断をしている生徒80%以上をめざす。 ・不登校生徒の出席率を高める。	・学年の日常生活の中で、意識して行動する場面を増やす。特に、身だしなみの徹底、自問自答の強化、時間を守る、あいさつをする、学習習慣の定着、力を入れる。 ・部活動を、「忍耐力や向上心を培い、達成感や成就感を味わう」ことのできる教育的意義をもつ活動ととらえ、全職員で取り組む。 ・週間アンケートを活用して、普段善い行いをしている生徒の把握と称賛に努め、自己認知につなげる。 ・不登校防止のチェックリストを活用し、家庭やSSWとの連携を促進する。	B	・アンケートでは、耐性は生徒75%、保護者69%が難しいことやつらいことに粘り強く取り組んでいると答えている。正しい判断に関しては、生徒82%、保護者81%が肯定的に答えている。アンケート結果より、生徒は困難なことや面倒に感じることから逃れようとする傾向が見られることを保護者はもちろん、生徒自身も自覚しているように思われる。今後も、耐性を培うために、学習面、生活面ともに根気よく指導していく必要がある。	・落ち着いた学校生活の確立 ・学習習慣の定着 ・善い行いをしたり、最後まで粘り強く取り組んだりした生徒の把握と称賛
教育活動	○生徒会活動の活性化	生徒会活動の中で、生徒自らが生活や能力を高めようとしているか。	・生徒会活動に積極的に取り組む、学校生活をよくしようとしている生徒70%をめざす。	・生徒主体の生徒会活動になるよう、各部委員会の担当の教員を中心に適切にサポートする。毎月の計画を綿密に立て、無理のないプランになっているかどうか、各担当教員間で連携して調整をする。 ・生徒会スローガン「KITA中旋風」の下、誰もが充実した学校生活を送ることができるような目標や決まりをつくり、実現させる。 ・校外活動やボランティア活動に参加させ、社会を知り、地域貢献につなげる。	A	・アンケートでは生徒の81%が学校生活を良くしようという思いをもつことができた。 ・生徒主体の生徒会活動になるよう、各部委員会の担当の教員を中心に適切にサポートすることができた。また、毎月の計画を綿密に立て、各担当教員間で連携して調整することができた。 ・生徒会スローガン「KITA中旋風」の下、誰もが充実した学校生活を送ることができるような目標や決まりをつくり、実現させることができた。	・新生徒会でも生徒主体の生徒会活動になるよう、各部委員会の担当の教員を中心に適切にサポートする。毎月の計画を綿密に立て、無理のないプランになっているかどうか、各担当教員間で連携して調整をする。 ・校外活動やボランティア活動に参加する機会を多く設け、社会を知り、地域貢献につなげる。
教育活動	●健康・体づくり	自分の健康・体づくりについて意識が高まっているか。	・スポーツテストの結果から自分の体力や運動能力を理解させ、向上させる。 ・生活習慣等の改善を促し、病気がけがを減少させる。	・生徒自身にスポーツテストの結果を分析させる。 ・自己に足りない体力を向上させるための「体づくり運動」を理解させるための授業を行う。	B	・アンケートでは生徒の80%が体づくりに関心をもつことができていた。 ・スポーツテストの結果を分析し、自己に足りない体力の要素を知った。自分の目的に合った体力を高める運動の例を知り、活動できた。しかし、一部の生徒しか日常的に活動を取り入れることができていない。 ・定期的に保健便り、教育相談便りを発行できた。便りを通して、心身の健康維持に必要な情報を伝えた。	・日常生活に取り入れやすい運動の例を具体的に紹介、実践する。 ・保健室の来室者数や病気やケガによる欠席者数の推移を掲示する。

④ 安心安全で生徒が明るく活動する環境を作る。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○安全安心づくり	家を出て再び帰るまでの生徒の安全確保はできているか。	・登下校時の交通ルール・マナー、学校生活のルール・マナーを守らせ、事故や苦情をなくす。	・毎月1日、20日の、朝の交通指導を確実に実行し、振り返りを共有する。 ・施設安全点検を毎月実施し、点検後の修繕の早期対応を図る。 ・定期的な自転車の安全指導および自転車点検を実施する。	B	・下校時の苦情や接触事故が1学期にあったため、放課後の下校指導を強化した。事故は数件にとどまったが、並進や斜め横断、ヘルメット未装着などルール違反があった。 ・施設安全点検を毎月実施し、点検後の修繕の早期対応を図っている。 ・自転車の安全指導や自転車点検は4月に生徒会を中心に行った。複数回の実施ができていない。 ・長期休業の前では安全指導を丁寧に行った。	・朝の交通指導よりも、放課後の下校指導を継続する。 ・施設安全点検を毎月実施し、点検後の修繕の早期対応を継続する。 ・定期的な自転車の安全指導や自転車点検を生徒会の生活委員と一緒に行う。 ・身だしなみ点検と同様に、自転車点検も行う。
学校運営	○家庭・地域や小中学校との連携	家庭や地域とつながりを持ち、小中学校と連携した教育を行っているか。	・北茂安中学校に安心して通わせているという保護者90%以上をめざす。 ・小中学校の授業参観や交流を推進する。	・各種の便りの中で、生徒の頑張りを学年・学年・学校の状況を積極的に発信する。 ・夏季休業中に小学6年生を対象に体験授業と部活動体験を実施する。 ・職員の研修(教育相談等)を合同で実施する。 ・小学6年生と保護者向けに中学校説明会を実施する。	A	・各種便り及びホームページによって状況報告はできている。 ・12月のアンケートでは、北茂安中学校に通わせてよかったという保護者の割合は96%だった。	・現在の情報発信の状況を変えないよう定期的な便り等による発信を行う。 ・小中学校との連携を密に行い、さらに多くの生徒が入学するように魅力ある学校づくりを推進する。

⑤ 業務を改善し、教職員の資質・能力を高める。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●業務改革・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化と勤務時間の適正化の推進ができたか。	・各分掌間の連携及び情報共有を図るとともに会議時間の1割削減を目指す。 ・教職員の超過勤務時間を、昨年度より1割削減する。	・校務シェアやホワイトボードを利用し、同一時間に集合しなくても情報を共有できるようにする。 ・教材の共有化をすすめる。 ・毎日の業務記録を点検し、管理職とともに超過勤務を減らす方策を個々に示させる。	A	・校務シェアによる回覧や連絡、職員室行事黒板へのホワイトボードの掲示により情報の共有は昨年以上に進み、職員朝会や職員会議の時間を短縮することができた。 ・教材の共有化については各教科での開きがあるがフォルダを活用することによりデータのやり取りは進んだ。 ・超過勤務時間は全体的には確実に減少し、1割以上を減少させることができていた。数人の職員の意識改革が必要である。	・現在の情報共有の在り方をさらに精査し無駄を省く。組織的な業務の配分をさらに進め、個人負担を減らす努力を進める。
学校運営	○教職員の資質能力の向上	ベテラン教師、ミドルリーダー、若手教師がそれぞれの役割を自覚して、教育活動に取り組み資質能力を向上させているか。	・同僚から学ぶ意識や同僚教師を育てる意識をもって教育活動をしている教師を90%以上にする。	・校内研究での全職員が持ちまわりで授業を行い、互いに研修を深める。 ・教育センター研修や教育事務所主催の研修への積極的な参加を促すとともに、学んだことやこれまでの経験を伝え合う機会を設定する。	B	・100%の職員が互いに学ぼうという意識を持っている。 ・校内研究における授業研究(道徳)については緒についた段階であるが、先進校視察で得た情報を校内研究会で共有することができた。授業づくりや評価については一定の進歩がみられた。 ・教育センターの講座については、意欲的に複数申し込み職員とそうでない職員との差があった。	・校内研究の深まりをもとめる。それとともに他教科についても研修を進める。 ・個人々での研修計画をもとに積極的な研修参加を進める。 ・1人1講座の研修を行うようにする。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策

4 本年度のまとめ・次年度の取組
 ・将来への夢や進路の目標をもっている生徒は目標の80%を超えることができていた。また、挨拶ができていた生徒や道徳教育が役に立っているという生徒の割合も80%以上の目標を達成できていた。しかし、学習への取り組みが不足しているため学習の成果は目標を下回っている。そこで生徒自身に努力が不足していることを認識させ、保護者の協力のもと今以上の学習時間の確保に取り組ませる。
 ・次年度も、夢をもつこと、進路へ具体的な目標をもつことについては、これまで通りの取り組みを進めていく。そして学力の向上に主眼点をおき、教科それぞれの指導の工夫はもちろんのこと、保護者や地域とも連携して学習効果の向上を具体的に追求していく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目